

したが見つからずじまいでした。多分狼に襲われたらしいとのことであった。ナホトカへ到着後、民主教育を受け、七月舞鶴へ上陸できた。

私は体が頑丈な方ではなかったが、復員後三十余年間、元気に過ごすことができました。

現地で亡くなられた戦友たちに、心より哀悼の念を捧げ、終わることとします。

終戦・満州・シベリア入国の

思い出

千葉県 城市 義雄

昭和二十年八月十五日、忘れる事も出来ない終戦、その翌日私は公主嶺から奉天行きを命ぜられ、山口県出身の井隅某と二人で貨車に乗り込む。その貨車は南下中の日本軍臨時列車だったと思う。途中各駅に停車、中国人の顔が我々日本人に対する憎しみの目が光って見える中、列車は奉天へ向け進行、文官屯駅に到着し

た。奉天は既に、ソ連軍が制圧、列車はもう進む事は出来ないとの連絡で、止むを得ず文官屯駅下車。南滿造兵廠へ行き阿部少佐（同郷出身）と会い、事情を説明し、取敢えず造兵廠の庶務課に事務員として働くことにした。そして原隊との連絡は完全に取れなくなつた。同じ庶務課の山本さん宅へお世話になり、毎日山本さんの古着で変装し、それを着用して一緒に務めるようになった、山本さんの家族は、奥さんとお嬢さん一人、三人暮らし。私を加えて四人暮らしとなった。官舎の附近も事件が毎日発生する。ソ連軍が駐在し、殺人、強盗、強姦が横行するようになった。造兵廠に行けば日本軍人はソ連軍に依り武装解除、そして何処かへ連れて行かれる、毎日列車で運ばれている等、ニュースも聞く。私自身の回りに危険が迫った事を感じ、偽名を決意（島根県出身）増田健治と命名、軍属として満州に来た。（勿論軍籍はない事にした）そして抑留から帰国迄全て偽名で押し通した。

連日のようにソ連軍の暴行の中恐怖におびえていたが、山本さん一家と自由を味わい乍ら楽しい日々を過

ごしていた十一月初め、元憲兵の高橋某がソ連軍を連れて私を逮捕に來た。奉天の刑務所に収容、独房生活、室内は零下二十度位。壁も布団も凍っており、苦しい日々が続く。愈々ゲー・ペー・ウの取調べがはじまった。罪名は国境でスパイ活動していたとの事。私は前述通り偽名で通したが、毎日の拷問で腕と頭の二か所を銃剣で刺され負傷、そしてマラリアに罹り、連日四十度の高熱に体は次第に弱ってくるし、此の儘死ぬのかと思ひ涙が止まらない。体は動かないし、ソ連の軍医が見回りに來て、死んでも良いからほっておけと監視に告げているのが夢のように聞こえていた。死ぬ前にせめて一度で良いから、両親、弟妹達に会いたい。悪い事もした事のない私が、何故こんな目に会うのかと思えば思う程悲しく涙があふれるばかり。帝国軍人として自ら志願して、国の為名譽の戦死をと、覚悟して軍務に励んでいた自分が、突然地獄の谷間に突き落とされた我が身を考えて、残念で望郷の念高まるばかり。飢えと寒さが加わり体は益々痛く放心状態が続く。動けぬ体をまたゲー・ペー・ウの取調べ、私の新たな言

葉を引き出す事が出来ず諦めたのか取調べを中止し、君の疑いは晴れた、帰って良いとの事、一瞬私は耳を疑った。

私の体が動かない事を知っているゲー・ペー・ウがソ連兵を呼び、家迄送るように指示し、私も二か月振りに外に出て、白く積もった雪の道を文官屯へと帰り、再び山本さん宅へ身をよせた。近所の皆さんにも私が無事に帰った事を喜び歓迎して戴いた。

背中は取調べ中何度も叩かれて真っ黒になっており、身動きも儘ならない。釈放から三日後、再びソ連軍が來て、今度は山本さん迄私と共に連行され奉天刑務所へ、そして大部屋、(五人位いたと思う)に収容され、再び厳しい取調べが始まった。今度こそ生きて日本に帰れないと悲壮な決心をした。本当に山本さんには申し訳ない気持ちで一ぱい。なんとか看守の隙を見て脱走も考えたが監視の目一段と厳しく、遂に脱走の夢は消えた。間もなくトラックが來て刑務所内全員奉天駅へ、そして貨物列車に乗り込む。皆さんを今から日本に帰すので港まで送る。だから輸送中はソ連軍の命令

に従って行動するようにとの指示で、皆喜んで輸送に協力した。もうすぐ日本に帰れる、何処の港から船に乗るんかと、皆故郷の想い出等を想像し乍ら、帰国話に花を咲かしていた。ソ・満国境を通過し、車内の食事は悪く、水も与えられず、寒さ厳しく、警備の歩哨は益々暴力を振うようになった。本当に日本に帰れるのか、また帰してくれるのだろうか、皆がぼつぼつ疑い始めた。貨車一輛に歩哨が二人、貨車の真ん中を中心に二か所に（有刺鉄線）を張り、下に小さな出入口を一か所作ってあり、床板に小さな穴が開けてあり、それが大小使用の穴。二人の兵隊は椅子に座り、ウォッカを飲み、パンを食べ乍ら、我々に對し悪体の限り、暴力は振うし、体の自由がきかない私は横になっただけ、もうなるように此の身を任すしかない。万一私が死んでも、日本へ連絡先もない、無国籍者として扱われる事を思うと、淋しくなるし、連行先で愈々悲惨な事件が待っていると思つて、益々寒さ身にしみる。数日走り続け広い野原を通り、列車は或るソ連領内の駅、引込線に誘導されて停まり、全員下車。

寒い中、五列縦隊で何時間歩いたか、漸く收容所に到着（チタ）。途中、歩哨のマンドリン銃の威嚇射撃で脅かされ心身共に参った。仲間の足どりも重く、收容所に着いた。とたん、諦めの中にも生氣を取り戻した。私達が入った部屋は六十畳位の板張り部屋で、隅にビール樽、高さ八十センチ、直径五十センチ位の桶が一個、それが便所、收容人数約八十名、内女性五名、白系ロシア人四名位の人々が一緒に收容され、人間社会では考えられない生活が始まる。今から此の儘チタにいるのか、また何処の地へ送られどんな刑が待っているのか一切分からない。

チタ→カラカンドへ移動、昭和二十四年十月二十四日、帰還した。

原始林伐採作業は地獄図

新潟県 山田正夫

極寒シベリアの原始林は雪が張りつく氷の山でもあ